

入選

『モルタルの記憶』

水野大雅

鋺くこて>受け台に盛られたモルタル。熟練の左官職人が鋺受け台を手前の方に斜めに傾ける。モルタルの山が形を変えようとする前に、鋺がそれを受け止め、音とともにモルタルはひらりと鋺の上に移る。鋺は壁につけられ、また、音とともにモルタルは平らに広がって行く。無駄の無い動きに無駄の無い音——いつの間にか壁一面がモルタルで塗られてゆく。

「すごいね！お父さん！」

ふと横を見ると、今年保育園の年長組になった長男も私と一緒にあって見とれていたようだ。左官職人は寡黙なままに壁の塗りつけを行っている。彼の顔と腕には初夏の光の陰影がくっきりと浮かび上がる。これまでどれだけの現場をこなしたのだろうか。その現場の数は彼の動きと音、そして、その身体が語っていた。

左官職人は今度は端がギザギザになっている櫛目鋺くくしめごて>を取りだす。一面に塗られたモルタルに押し付けて、引く。モルタルに線が刻まれる。また、押し付けては、引く……。

「海だね！お父さん。壁に海ができた！」

不思議なことを言うのが子どもの仕事。確かに不思議だが言われてみるとそう見える。櫛目鋺が曲線と作り出すたびにモルタルの水面に波が出来る。波は一定のリズムをもってうねり、しかも、一つとして同じ模様はない。心なしか、向こうから風が吹いて来た感じがした。壁面に沿って視線を遠くに向けると、はるか遠くに見える五月の湾は穏やかで、小舟をいくつか抱いている。波の音は聞こえる訳でもないのに、海風に乗って聞こえるような気もした。建築には海風は強敵なのだろうが、私にとってこの海風は実に心地よく、懐かしい。

(ずいぶん海風を感じていなかったものだ)

小学生の時に家の事情でこの場所を離れた。海風にも波の音にも無縁であった都会の暮らし。その音も空気も身体から抜けたころ、今度は仕事の都合でこの場所に戻ってきた。家の都合しろ、仕事の都合にしろ、海の波のようなもの。私はその波に抗うこともできず、またここに流れ着いた。祖父母を残してこの地を離れた時は四人、戻って来た時も四人。しかし、そのうち同じなのは私だけ。私と妻、子ども二人。私の両親も兄も戻ってこなか

った。そしてその時には、この地で私たちを見送ってくれた祖父母はもう鬼籍に入っていた。妻は私がそんな感傷に浸っている間、嬉々として施工会社と打ち合わせをし、自分の思うままに自分の新しい家を設計していたのであった。

「ここだったかなあ。」

私が追憶のままに、離れの方に足をすすめた。母屋は建物も玄関もすっかり変わってしまったが、この離れと裏庭は手つかずのままになっていた。荒れ放題の感が否めないが、どうしてか、ホッとした感覚が私の身体の奥から沸きだしてくる。かつての芝生は見る影もなく、雑草に取って代わっている中、それに覆われていない飛び石の部分が余計に目立つ。その飛び石の一番奥にあるところまで進み、ゆっくりと覗き込む。

(……あった！)

長方形の飛び石の端の部分にある10センチほどの窪み。随分と風化してしまい、他人にはただの窪みしか見えなかったそれは、小学生の時につけた手形であった。モルタルが固まりつつある中、私は悪戯心で思わず手を押し付けてしまった。その場所に刻まれた感覚と共に罪悪感とその触感の冷たさにあらわれていた。祖父はきっと知っていたに違いない。しかし、祖父は叱ることはなく、手形のついたモルタルの飛び石は修正されず、裏庭に設置された。以来、この家を離れるまで、その手形を見る度に、私の胸は苦しくなった。

私はその窪みにおそろおそろ右手を覆いかぶせるように当てる——胸が苦しくなると同時に、その窪みから暖かい何かが自分の体に沁み込んできた。

(……けれども……すぐにこの飛び石も……)

整地されてしまうだろうよ、と思っていた刹那、向こうから自分を呼ぶ声がある。

「おとーさん！ここにいたの～！」

長男の横にいたのは、先の左官職人だ。先ほどの寡黙な顔は何処かに消え、子どもとにこやかに立っている。

「御主人、こちらに、お願いしますね。あとは御主人だけですから……」

子どもが私の手を握り、左官職人とともに案内したのは、新しい門柱だった。レンガと木を組み合わせているように見えるが、モルタルを成形したものであった。その精巧さに驚きつつ、表札がはめ込まれたその下に見えたのは、3つの手形——大きな大人の手に、二つの小さな子どもの手。

「お父さんはここだよ！」

長男が指さしたのは、長男の隣の広い場所。3つの手形が固まっている割には、そこから離れた場所である。何だか歪だなあ、これが家族関係というものなのか？等と自嘲気味に思っていたら、長男はこういう。

「お父さんの手は大きいから、この広い部分にバーン！ってやるんだよ！」

そうなんだね。気を遣ってくれたんだね……。

「じゃあ、いくぞ！」

吹っ切れたように気合いを入れて打ったにも関わらず、まだ固りきっていないモルタルはペチンと気の抜けた音で応える。ゆっくりと手を離す。その手形を見た時、随分大きくなったものだと思うとともに、祖父の記憶の上に新たな家族の記憶が紡ぎだされるのだと、寂しくも嬉しくもあった。